# 野島千恵子の死を悼む

林　伸一

二〇〇六年八月、野島千恵子が大阪でなくなった。それは、ほとんど無名の作家の死であると同時に、私の母親の死でもあった。八十一歳で死因は、虚血性心疾患であった。

ここでは、できるだけ野島千恵子の作家としての足跡を辿ってみたい。

代表作は、昭和五十三年に第十三回北日本文学賞を受賞した「氷の橋」と昭和五十四年『婦人公論』の第二十二回女流新人賞を受賞した「日暮れの前に」である。

## 一、「氷の橋」

北日本文学賞は、富山市の北日本新聞社が昭和四十一年からはじめたもので、長年にわたって井上靖が選者を務めた。井上氏は「短編こそ文学の華、ごまかしがきかず、文章力、ものの見方も問われる」としている。同氏は選評に「野島千恵子さんの『氷の橋』には感心した。次々に夫や息子、娘たちに先立たれてゆく一人の女の生涯を、素直な筆で綴っている。特に小説として優れているところはないが、作りものでない実人生が感じられる。北海道の開拓地の自然もよく書けている」と記している。北海道の天塩川に冬の間粗朶を集めてつくった「氷の橋」が印象深いモチーフとなっており、タイトルともなっている。応募五百三編の中から選ばれた側の野島は、後に「井上靖先生と北日本文学賞」と題する　井上靖の追悼コラムを『大衆文学研究』第九十五号（平成三年八月）に書いている。作品は、昭和五十四年の元旦の北日本新聞に掲載され、後に同新聞社より発行された『井上靖選・北日本文学賞入賞作品集』（昭和五十九年）に収録されている。わずか二十ページ（四百字詰め原稿用紙三十枚）の短編である。実は「氷の橋」入賞の前年の第十二回北日本文学賞にも野島は、「黒いリンゴのお話」で応募し、最終選考通過作品の中に残っている。

## 二、「日暮れの前に」

「日暮れの前に」の方は、『婦人公論』昭和五十四年十月特大号に掲載された。また『駒田信二の小説教室』（野島千恵子著、昭和五十六年文芸春秋刊）にも参考作品として収録されている。二十八ページの短編である。

選者三人のうちの一人三浦哲郎は「まだ広い世間に生きている初老の女性の生身の性を描いている。それだけに、この作品の持つ性

の意味は一層切実だし、それを作品化するのは苦労と勇気の要る作業だったにちがいないが、作者は、書き出しの一行に象徴されるような、気取りのない、柔軟な、そつのない文章で大胆に描ききっている」と評している。その書き出しの一行とは、「ウィッグをいちどかぶってみたい、と思っていた」で、ウィッグ（かつら）をモチーフに五十代の独身女性の物語が展開されていく。女性が女性でなくなっていくのではないかという閉経の恐怖が生々しく綴られている。

ところが、野島本人は「このテーマで、と考えたとき、まず最後の一行が決り、それからは、憑かれたように、その一行に向かって、一気に書きすすめました」と自作について述べている。その最後の一行というのは、「そのとき、ふとこれから入っていこうとする部屋に、田上英子が坐っているような気がした」で、田上英子というのは、主人公の友人で同じ五十代の独身女性。癌で余命三ヶ月か半年という状態にある。

選者の平岩弓枝は「五十代の、こうした女性の心理は、私も年齢的に近いのでよくわかりますが、なかなか書ききれるものではありません。テーマも明快ですし、書き出しの巧さなど惚れ惚れとしてしまいます」と評している。

大庭みな子も選者として「過去と未来につながるふくらみがあり、作品の中に読者をひき込む力を持っている。この声を声にしたいという気持ちが動く」と述べている。

野島は、昭和五十五年の『婦人公論』三月特大号に自作の「日暮れの前に」の題材について語る形で、「女は女でなくならない」と題して、閉経、更年期障害、心身症、思い込みなどの問題を六ページほど論じている。

昭和五十六年一月発行の『別冊婦人公論』第三号には「情死志願」というタイトルの小説を書いている。十五ページの短編で、「わたしはうちの人を殺したんです」というショッキングな書き出しで始まる夫殺しの物語である。展開は軽く、コミカルでさえあるが、実は夫に精神病院に入れられた妻の妄想の話であったというオチがついている。

## 三、『北方文芸』と『にれ』掲載の作品群

札幌で澤田誠一が発行人となって出されていた『北方文芸』に野島は「昏い街角」と「氷の像」の二作品を発表している。

「昏い街角」は、昭和五十年二月号に載ったわずか七ページの作品で、四十をすぎた女性が大学生に橋の上で声をかけられる話。

「氷の像」のほうは、昭和五十一年七月号に載った作品で、雪の降る中で記憶喪失になりかけた女性が、だんだん記憶をたどっていくと夫による暴力の記憶がよみがえってくるという設定で、ついには自分の身を守るためとはいえ、その夫を死に至らしめてしまったことに気づくという話。後に、駒田先生からは「甘い」と評されたが、深刻なドメスティック・バイオレンスをテーマにした謎解きのような展開が読者を引き込む力を持っている作品である。

札幌の同人誌『にれ』の第一号（昭和四十四年）から第八号（昭和五十年）までに「ある風景」「おいらん淵」「黒いリンゴのお話」「炎」「『青年の環』読後感　差別―その陰にあるもの」「重たい蟹」「恋文と遺書」「落ち葉の揺らぎ」を載せている。

札幌が舞台で、夫の浮気が発覚し、夫婦間の危機が訪れたが、妻の機転でその危機を乗り越えるという内容の「虹いろの橋」という

野島の作品があり、札幌在住の期間に書かれ、新聞か雑誌に掲載されたことは確かなのだが、いつ何に掲載されたかが不明なままである。『北方文芸』と『にれ』に掲載された作品ではないことだけは、確認できている。

## 四、『まくた』掲載の作品群

東京の朝日カルチャーセンターの「小説の作法と鑑賞」講座に野島は長く通っていた。講師は、駒田信二で『まくた』という作品集を出して、合評会を行なっていた。作品集の名前は、切磋琢磨の「琢磨」を逆に読んで『まくた』としたらしい。昭和五十三年に創刊号が出ている。その中に野島は次のような短編小説を発表している。

「月の夜に」（『まくた』創刊号）は、南の島のセミナーに参加している四十歳を過ぎた女性が、夜宴の途中で月光のもとに一人で散歩をしながら北海道での回想にふけっているうちに迷子になってしまい、現実と回想の区別がつかなくなってしまうという話。

「梨」（『まくた』第三巻第四号）は、長年連れ添った妻に先立たれた独り暮らしの認知症の老人を主人公にした作品。妻の死を認めようとしない老人の心理を描いている。

「茶畑の向こうに」（『まくた』第八巻第一号）は、息子の顔もわからなくなった老女の認知症の問題がテーマ。孫がいないことを残念に思うあまり、嫁の置いていった人形を孫と思い込んで育てているという異常さを描いている。

「浜辺の白い花」（『まくた』第十四巻第二号）は、ガダルカナル戦の生き残りの老人が、孫に当時の様子を語って聞かせたのをきっかけに夜、夢にうなされて目がさめるという設定。エスペランス岬の浜辺の白い花は、日本兵のしゃれこうべだったという話。戦争生き残りの死生観がテーマとなっている。野島は、北海道新聞社発行の『月刊ダン』昭和五十九年二月号に「ガダルカナルで」と題する随想を投稿しており、本人が彼の地を訪れた時の見聞をもとに「浜辺の白い花」（平成三年）が書かれたことがわかる。

昨今の小説は、思春期の若者が主人公の作品がもてはやされる傾向にあると思われるが、野島の作品は、いわば人生の半ばから晩年、人生の秋にあたる思秋期の悩みや問題を題材にしたものが多く、いわば「思秋期小説」のジャンルに分類されると言ってっいいかもしれない。

ここでは紙幅の関係もあって、手元に残された『まくた』掲載の作品タイトルだけを挙げておきたい。掲載年は省略。小説だけでなく、ドキュメンタリーも含まれている。

「麦藁人形」「凍った血」「長い氷の橋」「鬼の首」「前へ進め」「埋葬地」「影」「古い恋人」「殺意のとき」「子供の声」「ある訪問者」「黒いリンゴの話」「ハイムーンの花の下に」「スピッツを見ていた女」「蟹」「骨の島」「影絵」「ひろびろとした墓地」「ミニチュアボトルと文鎮と」「パプアニューギニア百五十日」「帰郷」「鋏」「橋の上で」「ガダルカナルの一日」「『大菩薩峠』考」「『まくた点鬼簿』抄」（創刊二百号記念、平成六年八月）

## 五、「記憶の彼方」

野島は、自作の小説だけでなく、翻訳書も出している。ジェフニファー・テール作の『記憶の彼方』の翻訳を講談社文庫として昭和

六十年に出している。原作は英語で書かれたものであるが、野島は戦時中の英語を敵性語として排除する教育を受けていただけに、翻訳するような語学力を持ち合わせていたわけではなかった。どうやら学生がアルバイトとして翻訳した直訳調の原稿を日本語として自然で読みやすい作品に野島がリライトしたようである。荒訳を渡され、ホテルに缶詰になって、日本語として売れる作品に完成度をあげて仕上げたらしい。編集者には、原文に忠実である必要はなく、要は売れる作品に書き換えてかまわないとの指示を受けていたとのことで、本人は自分の創作的な要素も加味することができ、ホテルで仕事ができたのでリライトの仕事も悪くないと語っていた。今でもインターネットで検索すると『駒田信二の小説教室』と並んで、『記憶の彼方』が出てくる。本人を知らない人は、野島が相当な語学力の持ち主であったと思うかもしれない。

## 六、「中国旅行記・水滸の旅」

野島は、小説だけでなくノンフィクションの分野にも作品を残している。

昭和五十六年から七年にかけて、北海道の旭川市の郷土誌『豊談』に「中国旅行記・水滸の旅」を十回にわたって連載している。野島にとっては、はじめての海外旅行にあたり、『水滸伝』の舞台となった土地を訪ねてまわる十二日間の旅についての紀行文である。なぜ「水滸の旅」に出かけたかと言うと、当時中国文学研究者の駒田信二の小説教室に通っていて、駒田先生からの影響を強く受けていたためと考えられる。駒田先生が団長を務めたこともあり、同氏が四年間かけて完訳した『水滸伝』（上中下三冊、講談社）を読み、少々中国語も勉強してから旅に出たようである。前述の『駒田信二の小説教室』を書く仕事と並行して中国旅行を準備していたようである。後に新宿日本語学校から十ページほどの抜き刷りのような形でまとめられている。

## 七、『プクプクわにの国どきどき探検記』

昭和六十年にポプラ社から『プクプクわにの国どきどき探検記』という子供向けの本も出している。自らのパプアニューギニアでの百五十日間の体験を多くの写真とともに紹介している。ルビつきの大きな文字での二百六ページにわたる作品である。パプアニューギニアの共通語のピジン語で鰐のことを「プクプク」というため、表題の「わに」にも「プクプク」とルビが打たれている。この本は、社会福祉法人日本ライトハウス点字情報センターからノンフィクション点字版の単行本としても発行されている。

大人向けには、北日本新聞に二十回にわたる連載記事として「熱帯ひとり旅～パプア・ニューギニア見聞録～」（昭和五十八年八月二十二日～九月十三日）を発表している。これも後に二十ページほどの小冊子として新宿日本語学校から発行されている。また、昭和六十一年の『クロスロード』（協力隊を育てる会発行）十二月号に「月夜のバンブー・ミュージック」という記事を書いている。パプア・ニューギニアの竹（バンブー）で作った楽器とその曲を紹介している。物があふれ、スピードが重視される世の中にあって、パプア・ニューギニアの物は不足しているが、のんびりした生活を紹介することを通して、野島はスローライフ（ゆったり生活）のよさを訴えたかったのではないかと思われる。

## 八、評論その他―社会への発言―

野島は、昭和五十三年に日本戦没者記念会機関紙『わだつみのこえ』に「早すぎた殉死」と題して、自らの父親の終戦時のショックによる死について記し、昭和天皇批判をしている。また、昭和五十六年に朝日新聞論壇に「子育てに四つの落とし穴～暴力・落ちこぼれの原因家庭にも～」と題する一文を投稿している。戦時中に代用教員をしていたこともあり、教育問題への関心を強く持っていた。また、昭和五十七年「核戦争の危機を訴える文学者の声明」に五百六十二名の一人として野坂昭如、野間宏らと共に署名している。

さらに、野島の母親である高野しつかは、長年助産婦の仕事をしていたが、昭和四十三年に主婦と生活社から『母乳は必ず出る』という二百六十七ページの本を出している。当時母乳より粉ミルクのほうが栄養価も高くすぐれているという商業的な宣伝にまどわされて、母乳が出るのに粉ミルクを与える母親が増えたことを批判して、母乳の免疫性など赤ん坊を守る利点があることを説いた内容である。高野しつかは、もっぱら実践の人で、短歌などは詠んだようだが、まとまった本を書くほどの文才はなく、野島が聞き書きする形で大部分をいわばゴーストライターとして書いたようである。一般の人だけでなく、病院、産院関係者にも広く読まれるようになり、母乳の効果は広く認められるところとなった。同書の社会的影響力はかなりあったと思われる。タイトルからして、母乳の出し方、授乳のし方を書いた実用書だと思われがちだが、実は半分以上が高野しつかの自分史ともいうべきライフ・ストーリーがリアルに描かれている内容である。

冒頭の北日本文学賞受賞作品のモチーフの原型は、『母乳は必ず出る』の中に「氷の橋」と小見出しをつけた箇所に読み取ることができる。井上靖が野島千恵子の『氷の橋』には「一人の女の生涯を、素直な筆で綴っている。・・・作りものでない実人生が感じられる」と評したことが、野島の母のライフ・ストーリーが原点となっていることで納得がいく。

野島本人は、自分を「文学少女のなれの果て」と言っていたが、息子の私から見ても「文学少女がそのまま大人になり、歳を重ね、人生の幕を引いた」という気がする。北海道出身の野島は、開拓者精神を大いに発揮して、創作にもノンフィクションにも意欲的に取り組んだ作家であり、物書きであったと思う。私も物書きの息子として、雑文ではあるが、文章を書き続けたいと思う。そうすることが母親への供養となるような気がする。

野島は、ペンネームを野島千恵子にする前は「亜出優」としていた。「亜出優」は占い師に見てもらったところ縁起が悪くて売れないとのことであったがフランス語の「さようなら」を意味する「アデュー」を文字ってつけたとのこと。またの再会を期待する「またね」に当たるフランス語は「オルヴォワール」であるが、永の別れとなる「アデュー」を野島千恵子こと「亜出優」に言われてしまったような気がする。

（はやし・しんいち）